



王妃を寝取られ

孕まされた国王

基本GC 24枚

本編 179ページ



王妃を寝取られ

孕まされた国王

基本GC 24枚

本編 179ページ



んっんむっ...

くちゅ♡
国の習わしで、処女・童貞の
成人前の国王と王妃

あゝ♡♡♡
んっんむっ...

王妃とやっと1つになれる成人を目前に、
クーデターにより王座を奪われる王

うっ...
な割に乳首が勃つてきているのではないかと
した乳首が擦れて心地が良いぞ

む







高貴な王族女性は
痴態を晒し、自ら性を求める



私の名前はリグル王。
この国の王位を継承したばかりの若き国王だ。



まだまだ若いとはいえ小さい頃より帝王学を学び、
王として威厳と教養を身につけていると自負している。

隣で微笑む美人は、同盟国である隣国の姫アリシア。
この国の王妃となるべく幼い頃にこの国に移り住み、私と一緒に育った。



世間的には政略結婚のように捉えられるかもしれないが、
年齢も近い幼馴染のような存在でもある私達はお互いに愛し合っている。
王妃として様々な面で私をサポートしてくれる最愛のパートナーだ。

アリシアは王族という身分に笠を着ることもなく、
様々な立場の人達に配慮が出来る。



その美貌と高貴な雰囲気と愛嬌のある性格から、
王宮内の皆や国民達の誰もが憧れる女性だ。

今日も私とアリシアは謁見の間で、
国の運営に必要な様々な職務を担当している
家臣達からの報告と提言を受けている。



国の重要事項に決定を下す
王と王妃としての大切な仕事だ。

「リグル王、アリシア王妃、ご機嫌うるわしゅうございます。」

彼は騎士団長ゲオルグ。

前王の頃から仕え、先の大戦で大きな勲功を成し、
平民の身分ながら大出世をした男だ。



彼の指揮する騎士団の戦力は周辺国を圧倒する力をもっており、我が国ギオンの平和が保たれているのもこの騎士団の力によるところも大きい。

ゲオルグは軍人として優秀な男なのだが、少々困ったところもある…。

「本日はゲオルグ、提言がございました。」

「うむ、申してみよ。」

「以前から敵対の意思を示していたトラキア国になにやら不穏な動きがあるようです。国内に攻め込まれる前に、ぜひとも我が国から侵攻を開始すべきです。」



「またその話か。私は戦争は好かん。不穏な動きというのも思い過ごしであろう。却下だゲオルグ。」

「じつ、しかし国王！このままでは！」

「不敬ですよゲオルグ！
王が既に決定事項を下したのです。
素直に従うべきではありませんか」

「…はっ…アリシア様。申し訳ございません。」

「なに…分かればいいのだ。
ゲオルグとて我が国を想つての提言だったのだろう。
ただ少し自重が必要かもしれんな、ハッハッハ」

「くっ…若造の分際で…。このままでは我が国は…」

「ふう、今日もお疲れ様アリシア」

「はい、お疲れ様でございましたリグル」

「まったくゲオルグの奴には困ったものだね(笑)
私よりも歳上なのに血気盛ん過ぎていかんよ」

「ふふふ、そうですね。
でもリグルの対応も流石の王の落ち着きと貫禄でしたよ」

「ははは。そうかな。
アリシアもフォローしてくれてありがとうね」



ここはアリシアの寝室。

私達は既に結婚を済ませているのだが、
この国の習わしとして成人前の男女は夫婦であっても
生活を共にすることは禁止されている。

特に女性の処女体は神聖視されているので、
当然ながら大人の交際も成人するまでは
禁忌とされているわけだ。



私も思春期の男だ。
愛するアリシアと夜を共にしたいという気持ちは
日に日に増している。
下世話な話、正直、股間が疼いて仕方がないが、
ついに来月には二人は成人を迎えることになる。
あと少しの辛抱なわけだ。

「それじゃあそろそろ私も寝室に戻るよ。」
おやすみのキスをしようとアリシアを抱き寄せる。





んっ、んむっ...

ちゅ♡

くちゅ♡

成人を迎える前の私達夫婦が出来る最大の愛情表現はキスだ。

毎晩、寝床に入る前の数分のアリシアとのキス。
それはとても甘く、まだ女性の身体を知らない思春期の私の脳をとろけさせる。

ちゅ♡

くちゅ♡

アリシアの柔らかい唇、濃厚な唾液、物欲しそうに私の胸に押し付けてくる
豊満でふわふわの乳房の感触。
私は貪るように味わった。



うん、
キス気持ち良いね

アリシアの全てを味わいたい……っ

ああっ、もうたまらないよアリシアっ！

ちゅっ♡

くちゅ♡

へへ……もう来月だよ。
来月になったらもっと
気持ちいいこと一緒に沢山しようね。

うう……
そうだなもう少しの辛抱だ

名残惜しくキスを終わらせ、私は寝室に戻った。

寝室に戻った私には日課がある。
毎晩のキスの後の、私の1つの楽しみ、それは
寝る前のアリシアを覗き見しながら、自分を慰めるのだ。

私の部屋には、幼いころに壁に開けた小さな穴がある。
その穴はちょうどアリシアの寝室のベッド際に繋がっている。
そこにレンズを取り付けることでアリシアのベッドを
鮮明に視ることができるのだ。



さらに魔法石を加工して作った盗聴用クリスタルを
ベッドの下に取り付けてあるので、分厚い壁を通して
向こうの音だけはしっかり聞くことができる。

おやすみのキスをした後のアリシアは、今まさに
隣の部屋で自慰を始めていた。

彼女も年頃の女性になったからだろう。
昔よりも頻繁に自慰をするようになった。



もちろん彼女は私に覗かれていることなど知るよしもない。
私だけが知っている彼女の秘密なのだ。

アリシアはその華奢でキレイな指で
下着の上から股間をなぞるように擦る。





アリシアの漏れ出る甘い吐息を聞きながら、
私はたまらずペニスをしごき始める。

処女であるアリシアは指を自らに挿入はしない。
クリトリスを指で擦ったり圧迫するのが
彼女のオナニーの仕方だ。

下着から溢れ出た愛液が太ももを濡らし、
窓から差し込む月明かりに照らされてテラテラと
光る様子が覗き穴を通してよく見える。



アリシアの息づかいが荒くなり、クチュクチュとした
粘液の音が大きくなり、彼女の絶頂が近いことを
知らせる。





ああっ!

はっ!

んっ!

んっ!

んっ!

んっ!

ぐちゃっ♡

ぐちゃっ♡

ぐちゃっ♡

リグル!
リグルう!



アリシアが絶頂を迎えた瞬間に、私も穴を覗きながら
激しく射精した。

イク瞬間に私の名前を叫ぶとはなんて可愛い妻だろうか。
なんとも言えぬ満たされる所有欲と、
射精の快感の余韻を味わいながら私は床についた。



一ヶ月後

私達が成人を迎えるまであと数日となったある日、
ゲオルグがまた謁見を申し入れてきた。



またあの話か…と少しうんざりした気持ちになりつつも、
私は謁見を許可した

「どうもご無沙汰しておりました王、王妃よ」
ゲオルグは謁見の間に入るなり平伏もせずになんと言いつつ放った。

「無礼者！平伏せぬかゲオルグ！」

「やれやれ気づきもしませんでしたか、おめでたい。
既にこの宮殿は騎士団が占拠しておりますよ」

「何！？何を言っているんだ貴様！」

「ぎゃあっ！！」

ゲオルグの合図と同時に武装した騎士達が
謁見の間になだれ込み、アリシアが叫び声を上げる。



「リグル王にこの国の統率は荷が重かろうと思ひましてね。このゲオルグが王になってあげようということです。」

「貴様！そんなことが許されると思うのか！」

「なあに、リグル王の命まで取りはしませんよ。お前は俺の下で働いてもらうことになる」

こうしてギオン国は軍事クーデターにより、軍部が支配することとなり、騎士団長ゲオルグが王に就任することとなった。私と恐怖と驚きで絶句しているアリシアは、それぞれの自室で軟禁されることとなった。



その夜、
ガチャ。軟禁され外から施錠されていたアリシアの
部屋のドアが突然開く。

やあ、お邪魔するよアリシア

ゲオルグ！
あなたに呼び捨てにされる
いわれはありません！

そんなことはないさ。俺はこの国の王になった。
そしてアリシア、お前を王妃として娶ることにした。
つまり俺たちはすでに夫婦というわけさ。

そんなこと！
私は絶対に拒否します！



ほう、良いのか？
リグル王の命は俺の一存次第だぞ？

それに拒否すればお前の故郷国との同盟は破棄になる。
我が国の戦力なら簡単に攻め落とせるだろうな

くっ…
なんて卑怯な人…

そういうわけだ。
これから夫婦としてよろしく頼むぞ。

それと今をもってアリシア、お前の成人を
俺が認めることとする。
さあ素敵な初夜を過ごそうじゃないか



リグルは自室から盗聴用クリスタルを通して、
二人のやり取りを固唾を吞んで聞いていた。

「くっ、なんとかならないのか！
このままじゃ私のアリシアがゲオルグに奪われてしまう！」

しかし部屋から出ることも出来ないリグルは、
どうすることも出来ず、
ただアリシアの部屋を覗き、盗聴することしか出来ない。

では、まずは王妃に口で奉仕してもらおうか。
賢い王妃ならば、もちろん拒否したら
どういふことになるか分かっているな？

くっ……はい……



ゲオルグはベッドの前にアリシアをひざまずかせ、服を脱いで仁王立ちで彼女の顔の前にペニスを差し出した。

平民の俺が、王族女性に口で奉仕される日が来るとはな…流石の俺も感無量だ。

これが…ペニス…

嫌悪感と恐怖心に泣きそうになる。しかし王族女性としてのプライドが、気の許せぬ男性に泣き顔を晒すことを許さない。意を決したようにアリシアは舌を差し出し亀頭を舐め始める。



初めて経験する、口に広がる生臭い味と鼻に上がってくる
ペニスの濃厚な臭いで苦しくなりつつも
アリシアは必死に舌でペロペロと亀頭を舐める

レロッ

ペロッ

うっ…生臭くて…
気持ち悪い…



処女であるアリシアは何をどうすればいいかわからない。
ただ早くゲオルグの気が済んでくれることを願いながら、
必死にアイスを舐めるようにペニス全体に舌を這わせる。

リグルはその様子を歯ぎしりをしながら覗いていた。

なかなか気持ちいい可愛いらしい
フェラだが、少々物足りないな。
俺がどうすればいいか教えてやろう。

ピョッ

イクッ



アリシアの頭を掴み、ペニスを喉の奥まで一気に押し込む。

激しい嘔吐感に襲われるアリシア。
しかしゲオルグの大きな亀頭がしつかりと栓となり、
嘔吐すら許されない。

突然の出来事にうめきながら、押し戻そうと腕に力を入れるが、
軍人の力に勝てるはずもない。

ぐぽっ

おじっ！うえっ



こみ上げる嘔吐感に耐えつつ、鼻で呼吸を整えようとする
アリシアを全く気にかけず、腰を振るゲオルグ。

喉奥と舌の柔らかい粘膜がゲオルグのペニスを擦りあげる。

くっ…気持ちいいぞアリシア！
早くも出そうだった

ハグチャ
ハグチャ

おふん

アッ
アッ





イクぞー!!

ドン

ビュル

ビク

ビク

んおおっ
んんん~~~~!!

ゲオルグの大きな体格に見合った大量の精液がアリシアの食道に直接注がれる。

大量の射精をした後、ゲオルグはアリシアの喉から、ペニスをズルンと引き抜く。

「ぐうつ、あつ、ハアッ、ハアッ」

喉奥に残る熱い感触と胃から込み上げる生臭さでアリシアの気が遠くなりそうになる。

「は…初めてだから…
もう少し優しく…」

王妃としてのプライドが少し折られたのか、ゲオルグに弱々しく懇願する。



「そうだったな。」

お前のあまりの美しさに少々我を忘れていた。」

「ではもう少し丁寧に可愛がつてやろう。
その前に、かなり大量に出したから少し回復が必要だ。
もう少し奉仕してもらうことにしよう」

「その豊満な胸でペニスを挟んでもらおうか」
そう言ってゲオルグは、ベッドにもたれかかる。



言われるがままにゲオルグのその大きなペニスを胸で挟み込むアリシア。

「おお…これはたまらなく柔らかくて心地よい」

強制的に飲まされた精子の嫌悪感と、
胸をさらけ出して奉仕せざるを得ない屈辱感に
アリシアの目には涙が溜まっていたが、気丈に泣き出しはしない。

むにっ

むにゅ



「嫌そうな割に、乳首が勃ってきているではないか。
コリコリした乳首が擦れて心地が良いぞ」

くっ……
これは単なる
生理現象です……っ！

確かにアリシアの乳首は勃起していた。

誰にも触れられたことのない敏感な乳首は、初めての男性の肌との摩擦で、
アリシアの心とは関係なく性感帯としての役目を果たしてしまっている。

むにっ

むにゅ

ピンッ

ぐう…乳首が擦れてジンジンしてくる…。
ペニスも胸の中でどんどん膨らんできてるし…。

乳首の疼きに比例して、顔が火照ってくる。

「ぐう…最高だなこの胸は。さすがに俺の息子も完全復活だ。
このまま続けられるとすぐにまたイキそうだ」

「流石にお前だけに奉仕させるわけにもいくまい。お返ししてやろう」

むにゅ

むにゅ

ジン♡

ジン♡

ゲオルグは、アリシアのパンツを強引に剥ぎ取り、脚を抱えて恥部を顔の目の前に持ってくる。

きゃあー!!
やっやめてっ!!
見ないでっ!!

男性に裸も見られたことのないのに、突然一番恥ずかしい部分を思い切り見られて、パニックになる。

そんなアリシアを無視して、クリトリスにキスをするゲオルグ。



ひいっ！
んああっ！

膣口から小陰唇を通してクリトリスまで、
舌全体を使ってゆっくりと舐めあげられる。

感じたことのない激しい快感が雷のように身体中に走り、
思わず悲鳴をあげるアリシア。
恥ずかしさによる混乱を吹き飛ばすような快感だった。

にちゃ♡
べろおし♡

（な、なんなのこれは！？ 自分で指でするのと全然違う…。）

しかしなんとか我に返るアリシア

（こんな賊のような男に、いいように弄ばれては王族の恥だ）
必死に快感に抗い、声を抑え、身体が反応しないようにする。

戦場で数多くの女性を抱いてきたゲオルグの性技は巧みだった。
クリトリスを唇で吸引しながら舌で転がされ、
尿道口から小陰唇にかけての粘膜を優しくなめられる。



オナニーで慣れたクリトリスへの、味わったことのない快感に、気を抜くとイカされそうになるが、アリシアは必死に耐えた。
大量に分泌された愛液とゲオルグの唾液が混じって、肛門をつたってベッドをぐっしよりと濡らしていた。

「そろそろ本番だ。覚悟は出来たか？アリシアよ。」

どうせ嫌だと言っても、
どうしようもないのでしょうか？
せめてできるだけ
早く終わらせて…



覗くりグルの目の前でアリシアが
汚されそうになっている。

「やめてくれ…俺のアリシアを…
頼む…」

神に懇願するように二人部屋で叫ぶりグル。

フキエツ



アリシアの小さなマスコに、ゲオルグの亀頭がゆっくりと沈んでいきミロミロッとアリシアの処女膜が破れていく。

ついっ
ついっ
……！

痛みにアリシアのキレイな顔が歪む。

「よせっゲオルグっ！
それを抜くんだー！」

ミロッ

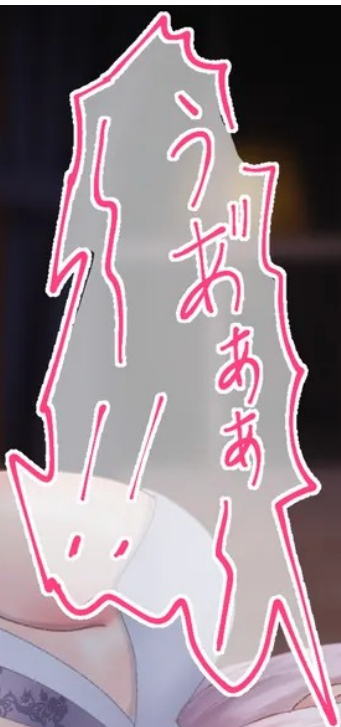
プクッ

ビクッ

ビクッ



自らの亀頭で、高貴な女性の処女膜を破く感触を
ゆつくりと味わった後、ゲオルグは二気にペニスを
根本まで突き入れた。



『やめるゲオルグー!!!』

ズッ!!



「動くぞ……!」

悲痛に叫ぶアリシアを気にせず、
ゲオルグは腰を振り始める。

処女膜が破れた痛みと何も挿入されたことのない
膣が感じる異物感で、思考がままならないアリシア。

隣の部屋には、茫然自失状態のリグル。
長年妄想してきたアリシアとの初夜を
突然他の男に取られた喪失感と嫉妬で気が狂いそうになる。



しばらく部屋にはパンパンツというアリシアの尻肉を打ち付ける音だけが、無慈悲に響いていた。

しかし次第にそこにニチャツ、ニチャツと湿った音が混ざってくる。

先程のクンニで多量に分泌されていたアリシアの愛液がゲオルグのペニスを包み、濡れた膣壁と擦る音だった。伴って、おさまり始める痛みと異物感。



どうだ初めてのセックスは？
気持ちいいだろう？

あゝ

あゝ

んあゝ

ぐちゃ

いいぞ、だんだんエロい顔に
なってきたじゃないか

気持ちが良いのかはアリシアにはよくわからない。
ただペニスで奥を突かれるたびに、感じたことのない熱い感覚が
下腹部から全身に拡がっていく。
もはや痛みはなく、苦痛はなかった。

ぽちゃ

ずちゃ

ぐちゃ

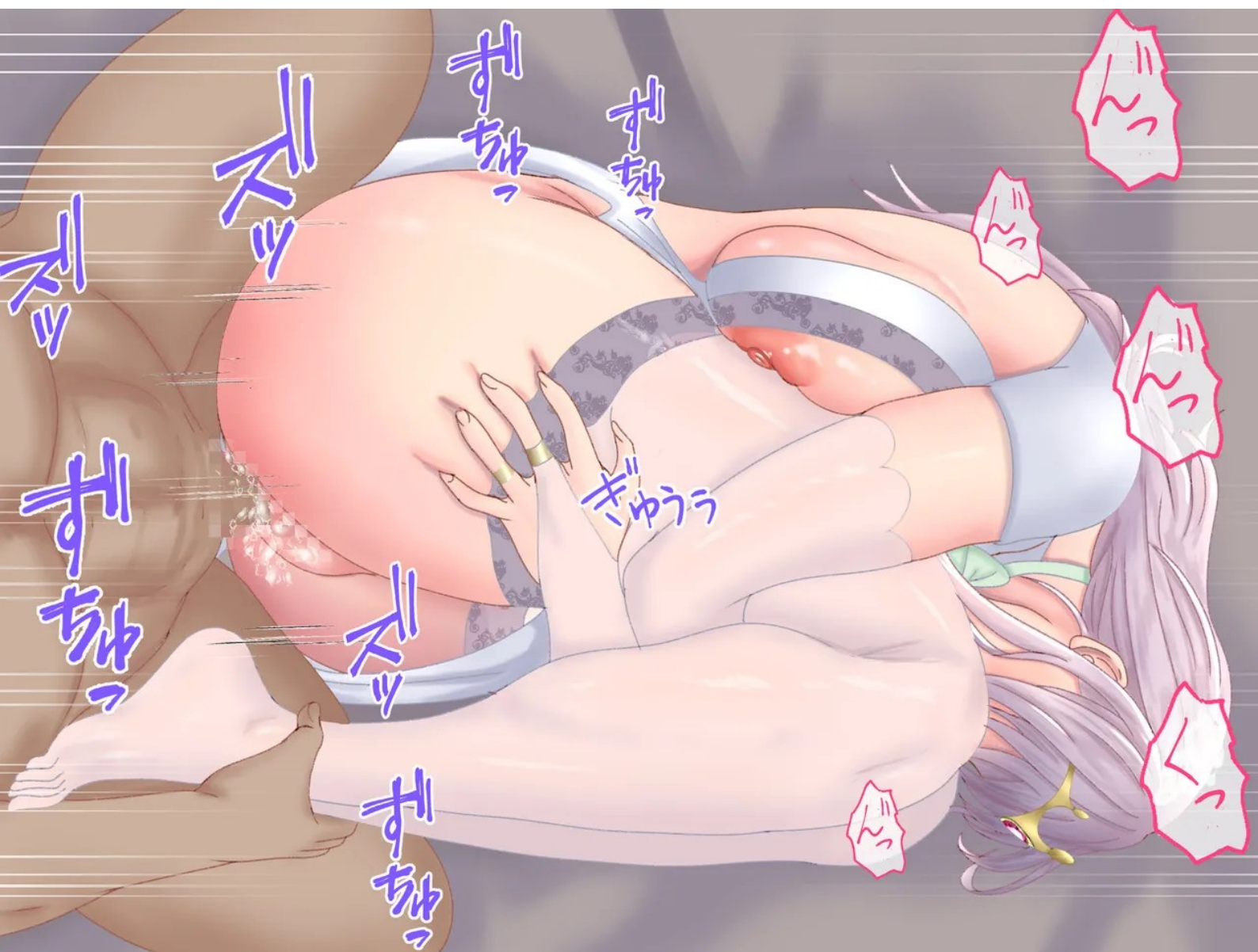


自分でも気づかないうちにエロい顔になっていると言われ
我に返ったアリシアは、膝を抱え、必死に顔を隠し、
漏れ出る声を押し殺す。

くくく、認めたくないか。
流石はプライド高き王妃様だ

ゲオルグはさらに激しく早く腰を打ち付けはじめる。





ズッ

お
ちゅっ

お
ちゅっ

ズッ

お
ちゅっ

ズッ

お
ちゅっ

ギゅうう

んっ

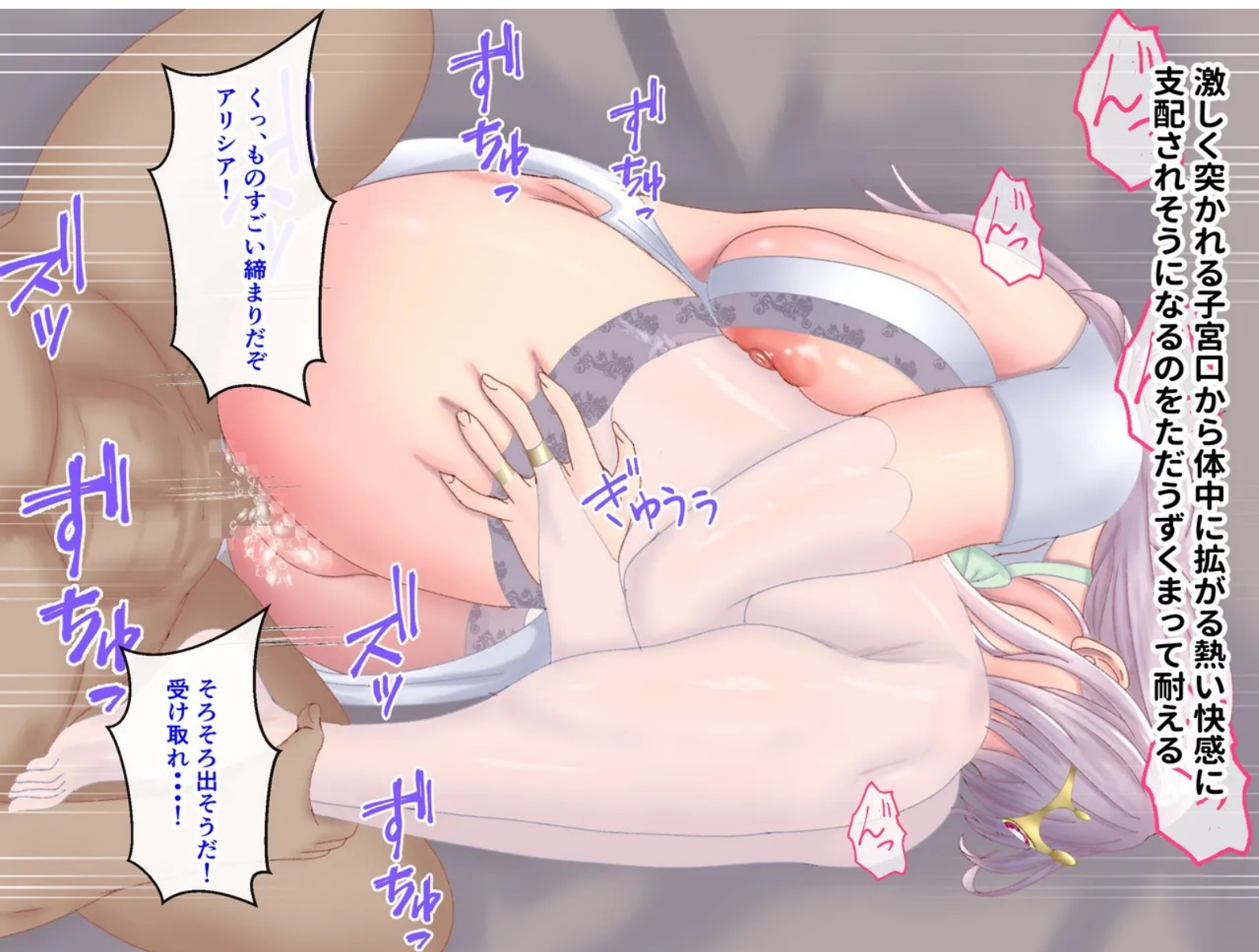
んっ

んっ

んっ

んっ

激しく突かれる子宮口から体中に拡がる熱い快感に
支配されそうになるのをただうずくまって耐える



くっ、ものすごい締めまりだぞ
アリシア!

そろそろ出そうだ!
受け取れ...!





ゲオルグは自室へ戻っていった。
緊張の糸が切れたアリシアはそのまま気絶するように眠ってしまった。
リグルはそんなアリシアを見ながら、股間を膨らませ、
嗚咽するように二人泣いていた。

ふう、最高に気持ちよかったぞ。
これから毎晩可愛がってやろう

どろお〜っ♡

ガクガク！

ぴんぽん

はー

はー

はー

ぴんぽん

翌日の夜

よう。
約束通り今夜も会いに来てやったぞ。

ゲオルグ…

おい俺は王だぞ。
王への挨拶はしっかりしろよ。

…本日もお疲れ様でございました
ゲオルグ王…

昨晩の屈辱感からか、反抗する気力もなく、
少ししおらしくなっているアリシア。





うむ、まあいい。
今日はお前にプレゼントがある。

宮廷魔法部に作らせた俺のペニス
そっくりに模した性具だ。

なっ、こんな不埒なモノ…
受け取れません…!!

そう言うな、これでも魔鉱石を使ったレアアイテムだ。
女性本来の性感帯を解放させる効果がある。
王族のお前には相当な効果があるはずだ。

確かに、エリート貴族達の生命力は平民に比べて非常に高い。
そんなエリートのトップでもある王族は、繁殖能力もずば抜けており、
性に関する能力も非常に高いと言われている。

リグルは隣室で聞き耳をたてながら、その話を思い出し出していた。

どのように使うのか教えておいてやる。



ベッドにマンべり返しにされ両脚をガッチリとホールドする体勢で
固定され、股間を強制的に剥き出しにされてしまうアリシア。

ちよっ…
こんな格好…っ、
やだ！！

あまりの屈辱と恥ずかしさに頭が沸騰しそうになるが、
屈強な騎士団長の肉体に抑え込まれ身動き1つとれない。

夢にまで見たアリシアの全てをさらけだした姿が
リグルの目の前に広がっていた。



改めて目の前でその性具を見せつけられ、
あまりの大きさにアリシアは恐怖感を頭にする。

ひっ……
怖いです……

なあに、昨日のような痛みは
全く感じない。安心するがいい。



ゲオルグは性具の先端を、優しくクリトリスにあてがい、撫でるように動かす。

んっ、
んあっ

自分で触り慣れているためかすんなりと刺激を受け入れるアリシアのクリトリス。しかも確かに魔鉱石の効果なのか、自分の指で触る数倍もの快感がある。

くう、
くううっ

またたく間に多量の愛液が膣口から溢れ出てくる



今度は先端を入り口に這わせる。性具が愛液にまみれていく。

可愛い声を出すじゃないか。
クリトリスはそれなりに開発されているみたいだ。
自分でいつもしていたな？

は、は、は、

くちゅくちゅ

そっ、そんなスケベなこと
私はしないっ……!!

ふふ、分かった分かった。
じゃあ入れていくぞ。



ゲオルグはゆっくりと根本まで性具を挿入していく。
先端がアリシアの子宮口までとどく。

うあああああああ……っ

既に処女ではないため昨晚のような痛みは感じず、
代わりに下腹部に感じる熱い感覚が増していた。

ゲオルグ

ぬるぅ〜

ここがポルチオというやつだ。
お前の好きなクリトリスとは
比べ物にならない快感だぞ？

そう言っつて、先端でトントんと子宮口を叩くように
刺激していくゲオルグ。

ひあっ！♡

(アリシアア！？
感じてしまっているのか！？)

リッリッリッ♡

リッリッリッ♡

はあっ♡
ああん♡

トントン♡

トントン♡

脚を閉じることも、顔を手で覆うこともできず、
恥ずかしさと快感を身体で受け止められないアリシアは、
ただ卑猥な声を上げることしか出来なかった。

そらどんどん速く
していくぞ！





イカされるのだけは…

やだっ、これ気持ち良すぎるっ
コイツにイカされるのだけは…





なかなか盛大にイッたな！
中イキは最高だろう？

「イッた？
イッたのかアリシア！」

ああ……
ああ……
ああ……

ゲオルグは、屈強な腕で小さなアリシアを四つん這いにさせ、
今度はペニスを一気に突き入れた。

キゅん

あああっ！
イッたばかりだから…
少し…休ませてっ

すけろっ♡





快感を受け止めきれずに逃げようとするアリシアの尻を
しっかりと両手で掴み、執拗に腰を打ち付けるゲオルグ

パン！パン！とアリシアの柔らかい尻肉が弾ける音と、
絶頂を迎える絶叫が数十分間、部屋中に繰り返し響き渡る。

くっ、そろそろ
俺もイクぞ！





あぁ...
熱いのでお腹が一杯になるう...

リッリッ
リッリッ

リッリッ
リッリッ

ドクン

ドク

あぁ
あぁ
あぁ



思った通り、流石王族の身体だ。
今まで抱いてきたどんな女よりも
素晴らしい抱き心地だぞ

（これがセックス……
ごめんなさいリグル。ワタシ、何回もイカされた……）

「アリシア……
どうしてそんな気持ちよさそうな顔をしてるんだ……」

数
日
後

家臣達は謁見の間でひざまずいていた。

王と王妃へ重要事項を報告するための、
主要部門の責任者を一同に集めた会議のためだ。

新しい王への報告ともあって、皆緊張した面持ちだった。

中央には、見せしめのようにリグルもひざまずいていた。
宮廷魔法部の活動報告を担当するように命令されていたのだ。

控えよー！！
ゲオルグ王とアリシア王妃が
お見えになる！

近衛兵が叫ぶ。

王と王妃の登場に、一同は言葉を失った。

なんとアリシア王妃が、目隠し、猿ぐつわをされてゲオルグ王に抱きかかえられて登場したためだ。脚をバタつかせ身をよじって抵抗するアリシアを楽々と担ぎながら、ゲオルグ王は悠々と歩き、玉座に座った。

ん？挨拶は。

んっ！
んっ！

啞然とする一同の顔を見ながら、何事もないようにそう言い放つ。



「……はっ！
ご、ご機嫌うるわしゅうございます。ゲオルグ王！
ア、ア、アリシア王妃……」
声を上げる一同。

ふむ。では各々報告をするように。
まずは宮廷魔法部の現在の
活動報告からだ。リグル。

スリ
スリ

ふ！？
んんー！！

リグルにまで見られていることを知って、恥ずかしさから
アリシアは頭になった尻を隠そうと身をよじる。
しかし力強いゲオルグの右腕にがっしりと掴まれ、
左手で尻を撫で回される。



「ゲオルグ…貴様！」

あ？なんだリグル？
処刑されていないのは
誰の慈悲のおかげだと思っている？

「うっ…。はい…。」

宮廷魔法部は、東国境地帯への諜報用魔法陣の整備を進めております。
今月末には準備が終わるかと。」

であるか。

処刑される恐怖心からすぐに怒りを引っ込め、報告をするリグル。



ゲオルグは、リグルの報告内容を聞きながら、懐からおもむろに例の性具を取り出し、アリシアの股間にゆつくりと挿入した。

アリシアの膣は、まだ開発されはじめたばかりだが、早くもゲオルグのペニスの形にフィットし、ピッタリと性具を包み込んだ。



他には？

全ての活動内容を報告せよ。

んっ！！！
んむう~~~~~！！！！

ゲオルグはそう言いながら、懐からおもむろに例の性具を取り出し、アリシアの股間にゆっくりと挿入した。

開発されはじめたばかりのアリシアの膣は早くもゲオルグのペニスの形にフィットし、ピッタリと性具を包み込む。



他には？
全ての活動内容を報告せよ。

んっ！！！！
んむう~~~~~！！！！

「はっ。あの…王直々のご依頼により性具の製作を行いました。」

ふむ。どのようなアイテムになった？

「その…今、王が手に持っておられる…」

使い方と効果を皆にも分かるように説明せよと言っているのだ。

ふっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

ぬっ♡

ぬっ♡



「製作を担当した魔術師からの説明により、まずと、その性具はゲオルグ王のペニスを型どり、魔鉱石を素材として製作いたしました。アリシア王妃の魔力特性に合うように調整されているため、アリシア王妃専用のアイテムとなっております。」



「使い方は、アリシア王妃の口や性器、肛門に対して、挿入・圧迫・摩擦によるマッサージを行います。」

「こゝ、効果としては、アリシア王妃の性感帯の本来の能力を解放し、生殖能力の向上させます……。」

すぢゅ

すぢゅ

ふっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

「特に膣への挿入による子宮口のマッサージは効果が高く現れると言われています……。」
くっ……くっ……」



「継続的な子宮口のマッサージによって、連続的な性的絶頂をアリシア王妃にもたらしめます。
性的絶頂に伴って、アリシア王妃の排卵を促し、より強い精子を受精しやすい状態へ胎盤が調整されます。」



「絶頂到達時に尿道口より多量の潮を吹く場合がありますが、非常に大きな快感を得ているためであり、王妃の身体への悪影響はありません。」



リグルの絶望の叫び、アリシアの絶頂を迎える叫び、
噴射した潮が床に飛び散る音が同時に響き渡る。

リグルが報告を終えると同時に、アリシアは激しく絶頂を迎えたのだった。

数日前までは処女で、あの気品にあふれていた王妃の絶頂を
迎える姿を見て、家臣達は放心状態で見守るしかなかった。

家臣達、皆に見られ、リグルにまるで自分の痴態を
実況されているかのような状況にも関わらず、
絶頂を迎えてしまい、恥ずかしさでアリシアは狂いそうになっていた。



ゲオルグは玉座に座ったまま、アリシアの後ろからペニスを挿入する。

両足がガクガクと痙攣して倒れそうになるが、両手を掴まれ、半立ちの
ような体勢にされるアリシア。

では次。
法務部門、報告しろ

ガクガク…

おっ
おっ
おっ
↑

ガクガク…

んんん！！

「はっ！そ、それでは…」
憧れの王妃の痴態を食いいるように見ていた法務部門担当
の中年の家臣が、我に返ったように報告を始める。

「法務部門では、成人するまでの男女の
条項の改定を実施・発表いたしました。」

「また、ゲオルグ様の新しい王位即位に関する法的
手ぬちゅ♡
及び他、
を行いました」

むしゅっ

おっ♡

おっ♡

「それ、随分して、ゲオルグ様・アリ
正式な婚姻を手続きいたしたし
ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

パチン

パチン

にゅん♡

ぬちゅ♡

にゅん♡

パチン

パチン

「であるか。
次、財政部門」

「はっ。」

「はっ。」
財政部門では、ゲオルグ王の命令に
従ったしました。

これは来たる隣国への侵略
目的としたものです」

「はっ。」
税収の増加を

「はっ。」
の、戦力増強

「はっ。」
ぬちゅ♡

「はっ。」
パチン

「はっ。」
ぬちゅ♡

「はっ。」
にゅん♡

「はっ。」
にゅん♡

「はっ。」
パチン

「はっ。」
にゅん♡

「はっ。」
おっ♡

「はっ。」
にゅん♡

「はっ。」
パチン

「増殖」による民衆生活・経済への悪影響は
「シミュレーション」されており、
さらに、既に
開始いたしました」
た本年度の予算計画の大幅な見直しを

「尚ほ、宮廷魔法部への予算分配を増加させ、削減を計画、王宮内での貴族の生活環境の悪化を防止し、貴族諸侯からの反響を招かないようにいたします。」

「現時点においては、我が国の予算は逼迫した状況に陥っており、隣国への侵攻および占領の増大は、税収の増加は大きく、来年度の予算は本年度の2倍程度となる見込みと想定いたしました。」

ひっ…はたひぐっ

ひ、ひんな…

見ないでえ
むんえっ!!

IP
チンッ

ぬちゅ♡

パチンッ

ぬちゅ♡

ちん♡

ぐっ♡

チンッ

ぐっ♡

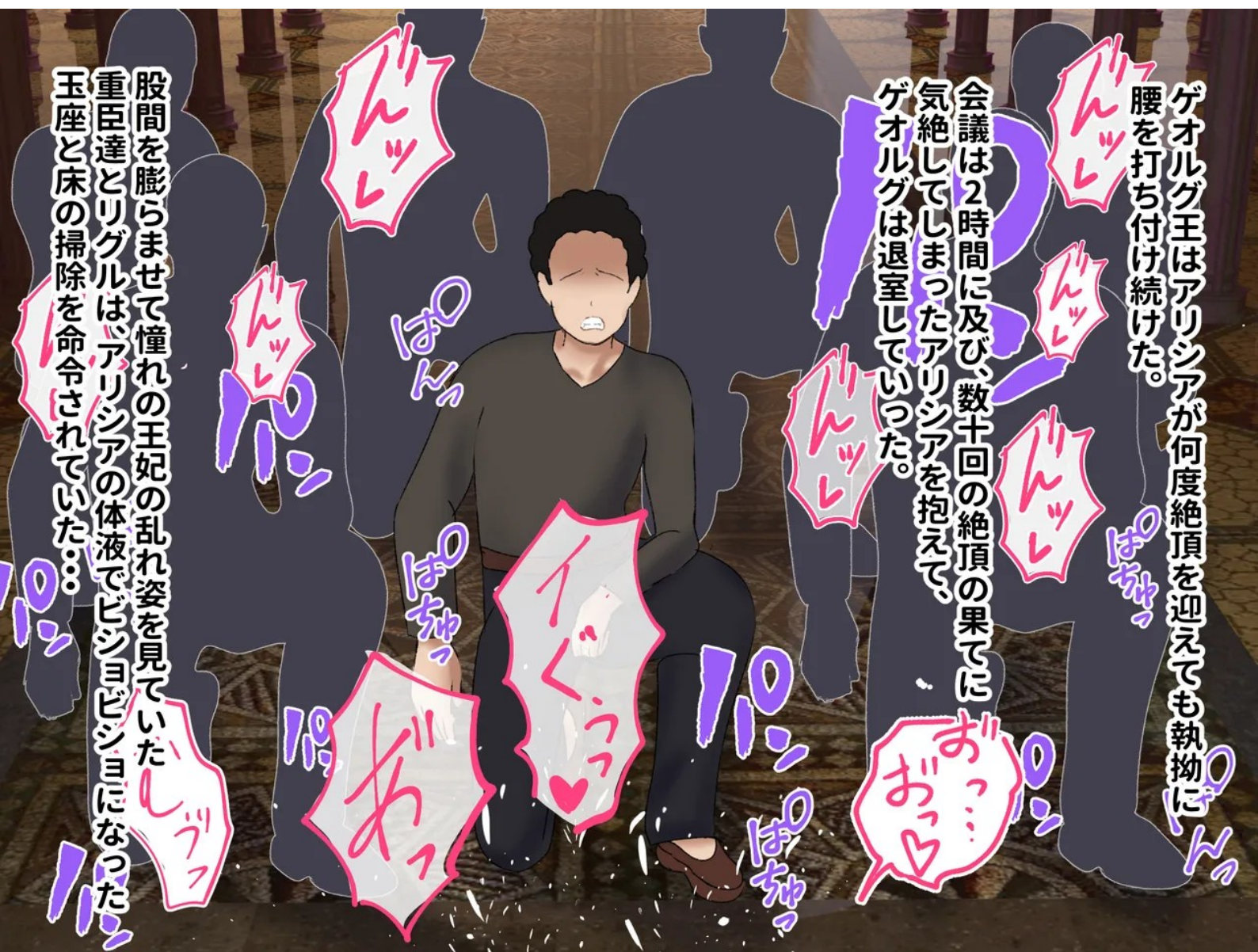
パチンッ



ゲオルグ王はアリシアが何度絶頂を迎えても執拗に腰を打ち付け続けた。

会議は2時間に及び、数十回の絶頂の果てに、
気絶してしまったアリシアを抱えて、
ゲオルグは退室していった。

股間を膨らませて憧れの王妃の乱れ姿を見ていた
重臣達とリグルは、アリシアの体液でビショビショになった
玉座と床の掃除を命令されていた……





目を覚ましたかアリシア
気分はどうだ？

最低の気分です！
皆にあんなに恥ずかしい姿を見られ、
リグルにまで…

すまなかったな。
あまりにお前が愛おしくて、会議の間も愛していたかったんだ。
お前も見られて興奮してただろう？前よりも締めまりがすごかったぞ。
それに恥ずかしい姿というが、お前は本当に美しいぞ。

そんなこと言って…
わたしは騙されません！



ゲオルグは優しくアリシアの服を脱がせていく

本当だよ。さすがは王族の女性だ。
最高の美しさだ、誇っていい。

みなもあまりの美しさによだれを
垂らして股間を膨らませていたぞ。

そ、そんな……

俺がもっとお前を美しくしてやる。



「ゲオルグのやつ！
何を適当なこと言ってるんだ！
アリシア、そんなやつ言う優しい言葉を聞いちゃいけない！」

「どこですか？」

「そうだ、袋の裏から裏筋を丹念になめあげていくんだ」

「んっ、くぷっ、ちゅぷっ」

「くそっ、何をやってるんだ！？
二人がベッドの方に来ないと見えない！」

それから数週間、ゲオルグはベッドでのセックスはしなかったため、リグルには二人の秘め事の音しか聴くことができなかった。

「そうだ、よくなってきたぞ、気持ちがいい。
これがシックスサインだ。」

「ちゅぷっ、んぐっ、じゅぽっ」

「フッ、フッ、あっ、ああああ!!」

「イッたか。
今度からイクときはしっかり俺に言うんだ、分かったな？」

「は、はい...」

毎晩のように聴こえる二人の交わりの会話と音

「そらそらっ、ここが好きなんだろう!」

「んあああっ、奥がっ、チンチンでグニグニされてるっ」

「んっ、んっっ、ああっ、イク、イキます!」

「ひいああああ!」
プシッ、プシッ

「イッてるのか? なんでイクんだよアリシア!？」

二人が身体を交わらせる日が増すことに、アリシアの身体の開発が進んでいくのが、音を聞いてるだけのリグルにも伝わってくる

「ああああっ、イッてる、今イッてますから少し止めてっ」

パンッパンッパンッ、肉と肉が弾ける音はさらに勢いを増す

「ひぐああああっ、イッてるのに
またイッちゃうう!!」

リグルにとっては自室で聞き耳を立てて股間を膨らませることしかできない日々が既に3週間ほども続いていた。

「くそっ、何をしているのか全然見えない」

「気持ちいいぞ最高だ！アリシア！」

「ああっ！んああああっ気持ちいい！！！」

「くっ、あいつとのセックスそんなに気持ちいいのかよ！」

二人の会話を聴いていると、アリシアがゲオルグ王の漢らしさに少しずつ心酔してきているのは明らかだった。

3
週
間
後



それから3週間、毎晩の二人のセックスの音がなくなった。
隣国との開戦によりゲオルグは王自ら軍の指揮で
出陣していたためだ。

リグルは部屋に軟禁されアリシアや他の家臣と会話することも
できないが、毎晩の焼けるような嫉妬にさいなまれることが
なくなっただけ平穏な3週間だった。

リグルは密かに我が国の敗戦し、ゲオルグの失脚を望んでいた。
しかし現実とは逆で、ゲオルグ率いる
騎士団は大活躍。大きな戦果を得ていた。



アリシアの寢室を覗き見る日課は欠かさないが、
アリシアも平穏な日々を過ごしているように見えた。

そして、この夜、ベッドに現れたアリシアは切なく
火照った顔をしていた。

しかもいつになく非常に露出度の高い下着を身に着け、
その手には例の大きなデイルドが握られていた。

ベッドに横たわったアリシアは、切ない顔でデイルドを眺めていた。

「いったいどうした？アリシア!？」

アリシアは火照つて赤くなった自らの股間に、太いデイルドを一気に突き刺した。トロトロに濡れたマンコはズブズブとデイルドを根本まで飲み込んだ。

ずぶずぶ♡

ああっ！
…王っ！
気持ち…いいっ

くううっ…

リグルは、毎晩リグルの名前をささやきながら
自慰にふけていた以前のアリシアの姿を思い出した。

「アリシア…
最近会えていないが今でも私のことを想って
オナニーしてるのか…？」

「少し前までの可愛らしいオナニーと比べると、随分と乱れたオナニーだけど…」

「使ってるのがあいつのプレゼントというのは癪だけど…」

ずぶっ♡

「でもまあみる！」

「アリシアは私のことを想って乱れているんだ！」

アリシアは、トロロンとした顔でディルドを動かし、子宮を優しく突きはじめた。



リグルも、アリシアの手の動きにシンクろはせるように、
ペニスをしごきはじめた。



んぁぁ…
ポルチオ気持ちいいのお…

もつとお…
もつと強く突いてえ！

アリシアの腕の動きは徐々に早く強くなり、
息づかいが比例して荒くなっていく。

あっあっ…
イキそうっ

「くっ…一緒にイクよアリシアッ！」





「……田舎……」

ゴシゴシ

きゃん

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

イキますっ!!
あああッゲオルグ王っ!!

「…え？」

リグルは自分の精液でまみれた手で、小さくしぼんだペニスを握ったまま、ショックで固まった。

もっとお！
もっと突いてえゲオルグ！！

その後もゲオルグ王の名を甘えた声で叫びながら、何度も何度も絶頂を迎えてるアリシアを、ただただ放心したまま見守っていた。



2
週
間
後

ガチャ。アリシアの寝室の扉が開く。

多大な戦果を得てゲオルグ王が帰還したのだ。

「おうアリシア。久しいな。今戻ったぞ。」

「あつ…ゲオルグ王。」

無事のご帰還嬉しく思います。

此度の戦、本当にお疲れ様でございました。」

畏まった挨拶ではあるが、アリシアの声は少し震えている。
夫の戦場からの無事の帰還が嬉しくて目には涙が滲んでいる。

「喜べ、今回の戦では大きな戦果を得た。
この国はさらに大きく発展することになるだろう。」

「そうですか。強い漢が治める国が発展するのは
当然のことと思います。」

「ははは、お世辞が上手くなったではないかアリシアよ。
それでお前の方はこの一ヶ月ほど、どうであった？」

「特に問題のない平穏な日々でございました。
メイド達は相変わらず良くしてくれますし」

「そうか。それだけか？夜はすぐ寝ていたのか？」
他にも何か報告することがあるだろうと
笑みを浮かべて尋ねる。

「夜は…いただいた性具で少々…」

「少々？」

「えと…少々、その、自慰を…しました」

「ははは、そうかそうか。」

ベッドにシミが出来ているからそんなことだろうと思ったぞ」

気づかなかったが確かに潮を吹いたあたりが大きくシミになっている。
顔を真赤にするアリシア。

「あまりイジメないでください…」

「くく、すまん。」

つまり、王妃殿は性欲が溜まっていらっしゃると」

「…はい。」

「ヶ月ぶりに王のご寵愛をいただきたいです…」

「であるか。」



お前の欲しがっていたペニスを
しっかり味わうがいい

あぁっ、気持ちいいです!

乳首も一緒に舐められるの
好きです!

ちゅっ♡

ぬるっ



くうっ、凄まじい吸い付きだ！

お腹すごく熱い

やっぱりオモチャより
全然気持ちいいです！





ずいぶん素直に
求めるようになったな

上も下も愛して
ください……

だって一ヶ月ずっと
待ってたんです

すちゅっ

すちゅっ

ぐっちゃん♡

ぐっちゃん♡

すちゅっ

ぐっちゃん♡

すちゅっ

んっ♡ あっ♡









まだ出てるっ
すごい出てるう

あっ！今イッたのに、
子宮に出されてるだけで
またイッちゃうっ！！

ぎゅうううっ♡

ぎゅうううっ♡
ぎゅうううっ♡

ぎゅうううっ♡
ぎゅうううっ♡

ぎゅうううっ♡

ぎゅうううっ♡



このまま繋がったまま、
もう一回やるぞ？

はい。
何度でも抱いてください

『くそつたれ！！
アリシアはもう完全に洗脳されてしまった！
なんとか、なんとか私が洗脳を解かないといけない！』

数日後
リグル寢室

「よう、ご機嫌いかがかなリグルさん」

「貴様！ノコノコと顔を出しやがって！」

「先月の戦争の戦果を見たか？
俺の方が完全に正しかったわけだ。
まあこの国の舵取りは俺に任せて、お前は細々と
俺の家臣として生きながらえるがいいさ。」

「そうそう、アリシアもすっかり俺になついているよ。
あれは最高の妻だ。
毎晩俺に抱かれるのも非常に喜んでるよ」

「そんなものの洗脳だ！
処女だったからお前しか男を知らないからにすぎない！
私が抱いてあげれば、一瞬で我に帰り、私に夢中になるだろう！」



「はっはっは。これは面白いことを言う」

「本当だ！私は王族だぞ？」

平民のお前などと比べて、生殖能力はずば抜けているんだ！」

「ほう、その貧弱そうな身体でか。」

面白い。では一度だけアリシアを抱いてみればいい。
見事、アリシアの心を取り戻してみせろよ」

「なにい！そ、それは…受けて立ってやる！！」



〜
アリシア寝室
〜

ガチャ

ゲオルグ王、
本日もお疲れ様でございました。

ソファでくつろいでいたアリシアは、部屋に戻ったゲオルグに丁寧に挨拶をする。



『うむ、アリシアもご苦労さまであった。』

ゲオルグが持ち帰ってくれた
異国の部屋着、早速着てみましたの。
どうでしょうか？

『とても似合っている。美しいぞ。
だが、今夜はこれも着けてみてくれるか』



これは……？

「視覚と聴覚を完全に遮断する拘束具だ。」

あ、そんな……
何も見えない、聞こえなくなっ
てしまいました

「よし、入れリグル」

久しぶりにアリシアの寝室に入ってくるリグル



『なんて美しさだ…』

大人の女性になったアリシアの美しさに目を奪われるリグル

やはり覗き穴から見ると、実際に目の前で見るのでは大違いだった。

リグルは、目隠しをされベッドの上でまじまじと見つめているアリシアに近づいた。

あの…ゲオルグ？
このままするのね？



相手がリグルだと気づかず、アリシアはひざまずき、ペニスに舌を這わせはじめた。押し付けられた乳房の感触がムニムニと伝わってくる。

『くおおっ、アリシアのっ！舌がっ！』

パロッ♡



優しく丹念にペニスを口にふくむ。
以前に覗き穴から見た、ゲオルグへの初めてのフェラとは全くの別物。
相手を気持ちよくさせたいという気持ちのこもったフェラだった。

んぐっ、ちゅぷっ

「うああ！すごい温かい！！」

感動で声を荒げるリグル
長年妄想してきたアリシアの奉仕を受け、リグルのペニスは
一瞬にしてギンギンに勃起する

あ…あの…
気分が悪いのですかゲオルグ？

くちゅ♡
ちゅぷ♡

『え?』

オチンチンが大きくならないです...。
お身体が悪いのでしょうか...?

ワタシのフェラ...
気持ちよくないでしょうか...?

申し訳無さそうな声で尋ねるアリシア

『くそっ、私がリグルだと伝えたい!
それに最高に気持ちいいよアリシア!』

ギン
ギン

アリシアは、ゲオルグのペニスを勃起させようと、根本まで口に飲み込み、舌をヌルヌルと這わせ、ジュルジュルとバキュームして頑張る。

『うああ、なんて気持ちよさだ！
このままじゃやばい！』

絶頂を迎えそうになり慌てて口からペニスを引き抜く。
初めてのセックスで余裕のないリグルは、
マンコに挿入しようとアリシアの尻を乱暴に掴む。





あ…今日はもう
挿れるのですね…？

「よっ、よし！じゃあ挿れるぞ！！
沢山イカせてあげるよアリシア」

一気に根本まで挿入するリグル

んっ…
入った…の？

ぬるっ

「うっうあああ！
柔らかくてっ、締め付けがやばいつつ！！
これが…アリスアのマスコット…！！！」



『よっよし…奥が弱いんだったよな…。
ポルチオを突きまくってイカせてあげるよっ!』

ん…

んっ

ぞりぞり♡

くじゅ♡

へこッ

へこ

へこッ

ポルチオが弱いアリシアをイカせようと必死に腰をふるリグル

無数のヒダがからみつくアリシアの名器により、
腰を振りはじめてわずか数秒でイキそうになるリグル

(なんだこれは…なんて気持ちよさだ。
これがアリシアのマンコ… もう…動けない…)



既に絶頂寸前で少しでも動かせば暴発しそうなリグルは腰を止めて必死に深呼吸をする。

（こんなにすぐに終わるわけにはいかない…）

うう…早くセックス
したいです…

あの…やはりお身体が…？
オチンチンまだ勃ってない…

自らの尻を物欲しそうに差し出しリグルの腰に押し当てる

「ぐああつ、今、動いちゃだめだアリシアッ！！！」

ぐい

ぐいっ

リグルは急いでペニスを引き抜き、なんとか暴発を耐えようと必死に
肛門に力を入れる

それとも…アリシアのおマンコ
気持ちよくないですか…？
もう飽きてしまいましたか…？

（イキそうだ…何か違うことを考えなければ…）

ピク

ピクッ



『ぐ…だめだっ！イグウウウ！！！』

えっ？
えっ？
えっ…あれ？

びゅん♡

ビュルン

耐えきれず、盛大に精子を吹き上げるリグル





あれ…勃ってないのに
射精されたんでしょうか？

「終わったようだな。」

くくく、王族の男のセックスは凄まじいな。
お前と一緒にしていたら、全くセックスの喜びを知らない
ままの一生だったと思うとアリシアが可哀想になるよ」

「ぐっ…もう一度だ！」

「そんなすっかりしぼんでしまったチンコで
いきがられてもな(笑)」

「俺が見本を見せてやるよ。よく見ていろ」



んあああ!
やっとチンチンきたあつ!

あつ、もうっ、
イキますっ!!



ほら、挿れただけでイッたぞ。

ギョウッ
(ううん)

ビクン

リッリッリッ

リッリッリッ





チンチン…
大きくなりましたっ

嬉しいっ♡
もっと突いてえ♡



またイグウウウウ!

沢山イカせてえ!

バックで数回の絶頂を味わった後、
疲れていると思われるゲオルグの身体に負担をかけぬように、
上にまたがって腰をふるアリシア

アリシアのマンコでっ

気持ちよくなつてえ



アリシアは、ゆっくりと腰を上げて膣壁とカリがニユルニユルとこする感触を味わい、今度は自分の全体重をかけて尻を打ち下ろし自らのポルチオを刺激する

くう、吸い付くマンコで絞り上げられる！

ンおっ……ンおっ……

おっ♡

おっ♡

もはや高貴な王妃とは思えぬ下品な喘ぎ声。尻を打ち下ろす度に絶頂に達し、とめどなく溢れる愛液と潮がベッドをビショビショにしていく。

パチン

ブラ

パチン

(さっきの私のペニスの時とは全然反応が違うじゃないか……。
なんでだよ、私は王族だぞ?)



(平民の男にイカされるなんて愚かな女じゃないか!!)



パチン

ブラ

パチン

あ

あ



くっ…そろそろ
限界だ…

ああっ、嬉しいっ！
アタシがゲオルグを沢山
イカせてあげますっ！

パチン

ブラッ

パチン



二人の熱く、濃厚なセックスは長く続けられた。

ゲオルグとの格の違いを見せつけられたリグルは、
負けを認められず、二人への恨み言をブツブツと
ただつぶやき続けていた。

ああん、中出し最高ですっ

ドクン

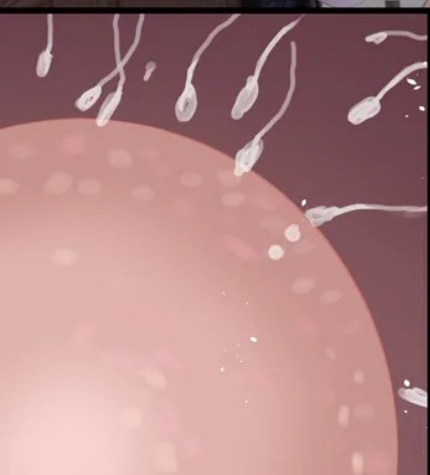
どきどき

ビクン

はぁ

はぁ

ビクン



クーデターによる王宮内の混乱や戦争も一段落し、国も落ち着きを取り戻していた。

当初は国民のなかにも軍事政権に反対する者たちもいたが、国の発展と暮らし向きも良くなり、ほとんどの国民は現政権と国家方針に賛同。ゲオルグ王も人気を獲得していた。

王と王妃の関係も良好であり、王宮内で働く家臣やメイド達も少しずつではあるが新しい夫婦を気持ち的に受け入れていた。
(リグルだけは自室にこもり、毎晩のように壁穴を覗き、恨み節を言いながら自慰をしている生活ではあったが)

先日、アリシア王妃の妊娠が発覚。

王は、会議中などにも度々、王宮内で公然とアリシアとセックスを始めるため、王宮内で働く家臣達にとってはこの一報になんの驚きもなく、当然のことのように受け止めた。

王妃ご懐妊のニュースは、国民達にも届き、さらなる国の発展と王夫婦の幸せの知らせを皆が喜んだ。

アリシアが妊娠して3ヶ月が経った頃。

王と王妃の幸福な姿を定期的に国民に見せるべきだという
王の提案による祭りが執り行われようとしていた。

祭りの内容は簡素なもので、少数の騎士を護衛とし、
王と王妃が一頭の馬に乗って、城下町を周るパレードである。

国民達は、王・王妃が間近で見れるとあって、祭り当日は街道には多くの屋台が立ち並び、大勢の人が集まり、二人の登場を待っていた。

王城の大きな石門が開き、近衛騎士の馬がまず出てくる。

そして一際巨大で立派な輝く黒毛をまとう騎馬が現れ、そこに騎乗する二人の姿に国民達は驚き啞然とした。

祝福する国民達の前に現れたのは、王の肉棒が肛門に深々と刺さった状態で、王に抱きかかえられるように騎乗している王妃だった。

しかもその表情は決して苦痛を感じているものではなく、むしろ喜びを感じていると分かるものだった。



数ヶ月前に、リグル王の傍らで微笑んでいたアリシア王妃は、遠くからでも神々しさを感ずる気品だった。

そんな王妃がアナルで新しい王の太いペニスを咥えこんでいる。国民が驚くのも無理はなかった。

妊娠初期のアリシアの身体は、お腹が膨らみはじめ、乳首にも色素がつきはじめ、肉付きもよくなってきていた。

高貴な女性の妊婦姿の美しさに、男性達からはため息が漏れる。

立派な王の馬は、ゆっくりと悠然に、一歩一歩を踏みしめて街を闊歩していく。



ゲオルグ！
みんな見ています…
流石に恥ずかしいです…

何を言うアリシア。
お前のこんなに美しい姿。
俺だけが独占するのは良くないだろう？



それにつ、んっ……♡
馬が揺れて……♡
お尻気持ちよくって……♡

妊娠が発覚してから、ゲオルグはアリシアと子を氣遣い、安定期に入るまでは
アナルセックスをするようにしていた。
そのためアリシアのお尻は既にすっかり開発されてしまっていた。



馬が脚を踏み出し大きく上下に揺れるたびに、ペニスが自動的に
アナルをピストンする。



ああっ！この格好気持ちいいっ
お尻の中からポルチオも刺激されてるっ

ふっ
あっ
んっ

ぬぽっ
ぬぽっ
ぬぽっ

激しく速いピストンではないが、ゆっくりとリズムミカルな
ペニスの出し入れは、ジワジワと確実にアリシアを絶頂へ導いていく。
王宮内でのセックスで見られることが快感に変わっていったためか、
国民大勢に見られる恥ずかしさはさらに大きな快感になっていった。





もうイクのっ！
お尻でイッちゃうっ！！
よし俺も出そうだ！尻に出すぞ！

ふっ♡
あっ♡

てニッレ

てニッレ

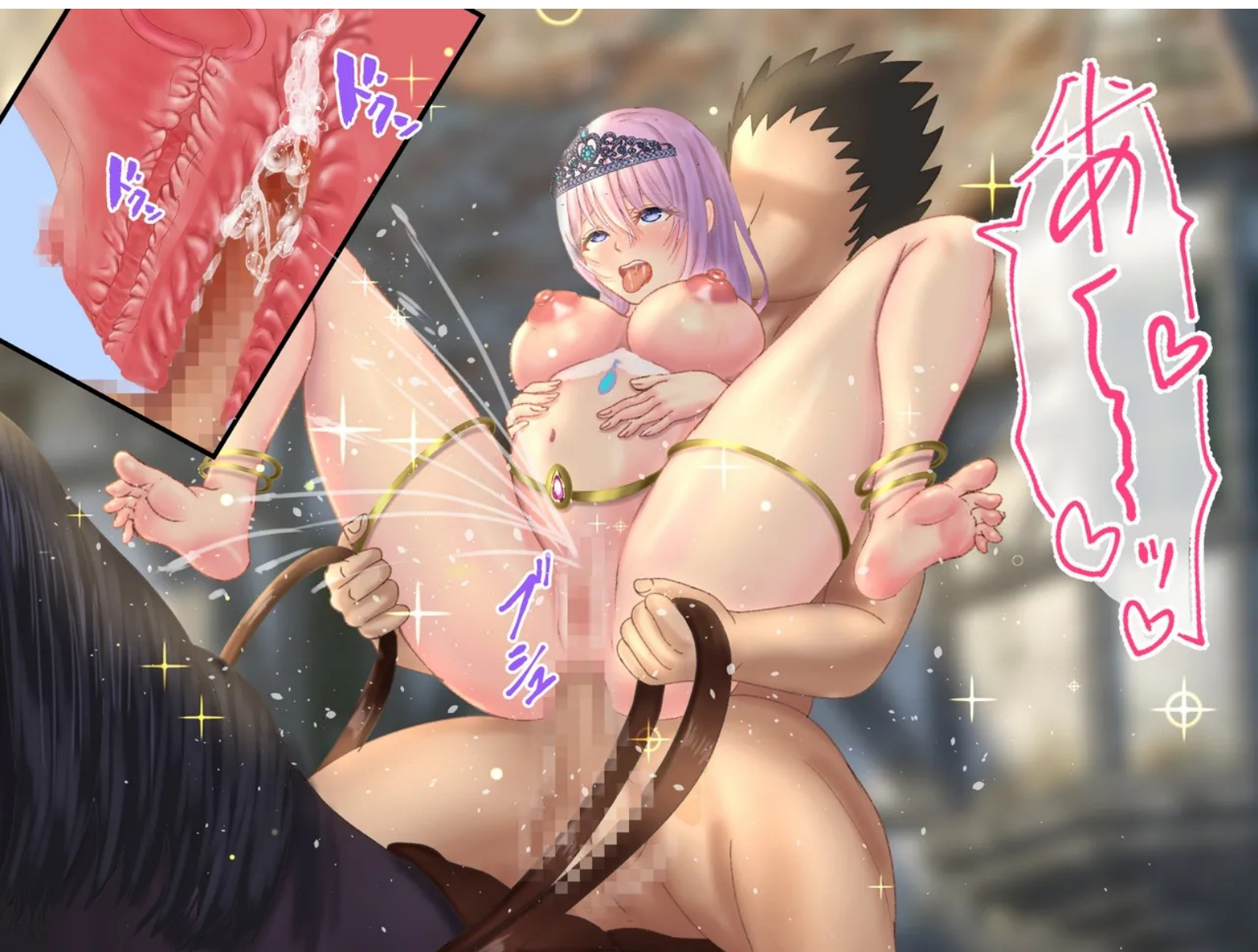
あっ♡

くちゅ

くちゅ

くちゅ

くちゅ



絶頂の度に王妃の股間から吹き上げる潮に、キラキラとキレイに太陽の光が反射する。
精子でお腹の中が二杯になり、下品な音を立てて肛門から精液があふれてくる。

そのアンビバレントな光景に民衆たちは心を奪われていた。



この王妃の妊娠を祝う催しは、最初は驚きもあったが、国民達にも概ね好評で毎月開催され、民衆たちは月ごとにお腹が大きく変わっていく王妃の姿を楽しみにした。

そして妊娠9ヶ月目

「明日は、毎月の祭りの日だな。そろそろ臨月だから、明日が最後の祭りになるだろうな。」

はい、そうですね。
明日が楽しみです。

「うむ。お前もすっかり見られることに慣れて、群衆の前でするセックスが好きになったな。」

えへへ。私をこうしたのは全てあなたですよ。
でも、乳首もお腹もすっかり大きくなってしまったし、
少し恥ずかしいです。

「ふむ、下着を脱いでよく見せてくれ。」



ほら…乳首もビラビラも黒ずんでしまっ…
だらしない身体でしょう…？

「そんなことはない。素晴らしいぞアリシア」

嬉しい。ありがとうゲオルグ。



（アリシアのボテ腹……くそ、確かに美しい）

相変わらず覗き見をしているリグルも認めていた。

アリシアの幸せな姿を皆に見てもらいます。
明日はよろしくおねがいしますねゲオルグ。



その日も天気がよく、催し物は滞りなく、執り行われることとなった。

パレードは、妊婦への体力的負担も考慮して、日の傾いた夕方以降の開始となった。

臨月も近い出産前最後の祭りとなることもあり、いつにも増して群衆たちの期待は高まり、赤子・病人以外のほぼ全ての国民が街道に集まった。

いつもどおり仲睦まじそうに一頭の馬にまたがって登場する王と王妃。
はちきれそうに大きくなったアリシアの乳房とお腹、黒ずんだ乳首に
盛大な喝采が送られる。



みろ、皆がお前の姿を祝福してくれている

はい、ワタシは幸せものでございます
ゲオルグ



馬の蹄の音と同じリズムで、ペニスが膣壁をこする
グチュグチュとした音が街道に響く。

ああ…
ゲオルグのチンチンが子宮をノックする度に、
お腹の子も喜んでるようです。



早くてごめんなさいゲオルグ。
ワタシもうイキそうですっ

ああ、何度でもイク姿を
皆に見てもらおうがいい

アリシアが痙攣しても不安定にならないように、
しっかりと後ろから抱きしめ安定してあげるゲオルグ



馬のゆっくりとした動きに合わせたスローなセックスは、激しさのない落ち着いた絶頂であり、しかし非常に濃厚な快感をアリシアに与える。

すでに脚を抱えられるお腹の大きさではないため、以前のようなキレイな潮吹きは拝めなくなったが、その代わりに大きく膨らんだ乳首から母乳が吹き上がり、群衆達は美しさに大きな拍手を送った。



流石は開発されきった王族の女性である。

二度絶頂を迎えた後は、馬が一步動く度に連続で絶頂を迎え続けた。
馬が着ける鞍からは潮が垂れ落ち、母乳はしぶきとなって風に乗った。

強い王と美しい王妃、幸せそうな二人の姿、そしてこれから生まれくる王子を思い、
群衆達は国の平和と繁栄を確かなものと思うのであった。

～ENDS～





